

1 腐敗病

A 生態と防除のねらい

- 1 伝染源は、ほ場に残った被害レンコンと保菌した種ハスが主であるため、健全種ハスの植え付け及び被害レンコンや発病ほ場の屑レンコンの処分を行うことが重要である。
- 2 フザリウム属菌による褐色腐敗、ピシウム属菌による黒紫色腐敗があり、一般にフザリウム属菌によるものが多い。フザリウム属菌による褐色腐敗には、冬期の湛水が効果的であるが、ピシウム属菌による腐敗に対しては冬期間落水して乾燥させることが必要なので、被害の状態を確かめ、耕種的防除に重点を置き、対策を講ずる。

B 耕種的防除法等

- 1 健全種ハスを選ぶ。
- 2 被害残さは、ほ場外に持ち出し処分を行う。
- 3 生育初期は、生育促進のため浅水とするが、夏期高温時は深水にし、水温を30℃以上に上げないようにする。
- 4 フザリウム属菌による腐敗は冬期湛水し、ピシウム属菌による腐敗は冬期落水して乾燥させる。

2 褐斑病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は、枯死した葉柄の被害部で越冬し、伝染源となる。
- 2 高温多湿時に発生が多く、ハウス栽培では特に発生しやすい。
- 3 発病葉や葉柄は集めて処分し、ほ場や畦畔に残さないようにする。生育が衰えると発病しやすいので、根ぐされや肥料切れをおこさないように肥培管理を行う。

B 耕種的防除法等

- 1 被害残さは、ほ場外に持ち出し処分を行う。
- 2 施肥、かん水などを適正に行う。

3 アブラムシ類（クワイクビレアブラムシ、モモアカアブラムシ）

A 生態と防除のねらい

4月中旬頃から用水路に自生している植物に寄生しハスに飛来する。主として萌芽、立葉（葉巻）に多数寄生し吸汁加害するので、4月下旬～5月上旬の時期に重点防除する。

4 ハスモンヨトウ

A 生態と防除のねらい

- 1 果菜類、葉根菜類、イモ類、マメ類等多くの作物を加害する。
- 2 3月から成虫のふ化が見られ、秋期にかけて発生が多くなる。レンコンでは7月以降に被害が大きくなる。
- 3 幼虫はふ化後しばらくは集合して食害するため、被害初期は表皮のみを残したすかし状の葉が見られる。齢期が進むと薬剤の効力が低下するので、このような被害葉が見られたら防除を行う。
- 4 フェロモントラップを利用し、発生時期、量の把握に努める。
- 5 病害虫防除所のホームページ (<http://www.jpnn.ne.jp/kumamoto/>) に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。

5 スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

A 生態と防除のねらい

- 1 平坦地のレンコン田、水田、水路、河川、湖沼に生息する雑食性の貝である。
- 2 生存期間は2～3年と長く、殻高（殻の底面から先端までの長さ）50mmに達する大型の貝である。
- 3 冬季は、水田や水路などの土中に潜り活動を停止する。4月上旬頃から活動を開始し、10月頃から再び土中に潜る。レンコン田では、入水後、収穫まで活動する。
- 4 雌貝は、ふ化後、約50日で産卵可能な殻高20mmまで生長し、死亡するまでの2～3年間は4月から10月の活動期間に連続して産卵を行う。
- 5 卵塊の色はショッキングピンクで、レンコン田では茎葉や波板、畦畔、水路の壁面などの水面上に産卵されるためよく目立ち、生息の有無が容易に確認できる。
- 6 水面下にあるレンコンの幼葉を歯舌で舐めるように食害する。

B 耕種的防除法等

- 1 産卵5～10日後の卵塊は水中への払い落とし、暗赤色や黒色のものは圧殺する。これらの作業を地域全体で定期的に行うことで次世代の密度を低下させる。
- 2 レンコン田、水田、および周辺水路に生息する貝を捕殺する。
- 3 水路からレンコン田への侵入を防ぐため、取水口および排水口は金網（4mm以下）で覆う。さらに、排水口は、常に排水路の水面より高くなる場所に配置する。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

- 1 植え付け前に石灰窒素を施用する場合は、商品や製造会社で使用方法が異なるため、必ず使用前に使用方法を確認する。
- 2 石灰窒素は窒素肥料としての肥効があるので、使用したレンコン田での施肥量には注意する。また、薬害の発生にも注意する。
- 3 メタアルデヒド剤（IRACコード：8）は、貝が摂食等することにより効果が現れるため、処理前に他のスクミリンゴガイ防除剤を使用しない。